

P20 北九州市内における小児歯科来院患者の歯の異常に関する研究

A survey on dental anomalies of pediatric patients in Kitakyushu City

○藤田優子¹⁾、空田安博¹⁾、橋本敏昭¹⁾、山崎要一²⁾、牧 憲司¹⁾

Yuko Fujita, Yasuhiro Sorada, Toshiaki Hashimoto, Yoichi Yamasaki*, Kenshi Maki

九州歯科大学 健康促進学専攻 機能育成制御学講座 口腔機能発達学分野¹⁾

鹿児島大学大学院医歯薬学総合研究科 小児歯科学分野²⁾

Division of Developmental Stomatognathic Function Science, Department of Growth and Development of Functions, Kyushu Dental College¹⁾

Department of Pediatric Dentistry, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences²⁾

【目的】本研究の目的は、近年の小児における永久歯の異常の発現率が、数十年前と比較して増加している、という仮説の真偽を検証することである。【対象と方法】1990年から2008年5月までに九州歯科大学小児歯科および北九州市内の2件の小児歯科医院に来院した、5歳から20歳までの男女1375人（男児652人、女児723人）のパノラマエックス線写真をもとに永久歯の異常に関する統計調査を行った。【結果】1375人のうち、275人（男133人、女142人）に永久歯の異常が認められた（20.0%）。なかでも、先天性欠如歯（第三大臼歯を除く）の発現率が13.7%で最も高かった。欠如歯の数が最も多かったのは、下顎第二小臼歯、次いで下顎側切歯であった。過剰歯は53人（男児42人、女児11人）にみられた（3.9%）。矮小歯は8人（男児3人、女児5人）の上顎側切歯にみられ、4人は両側性、残りの4人は片側性であった。片側性に矮小歯が認められた4人のうち、3人は、反対側の側切歯が先天性欠如であった。【考察および結論】1963年、NiswanderとSujakuは、日本人の先天性欠如歯の発現率は8.5%、過剰歯の発現率は3.4%である、と報告しているが、いずれも本研究結果のほうが高い発現率を認めていることから、少なくとも先天性欠如歯と過剰歯は、40年以上前と比べて増加している可能性があることが示唆された。